

体育場に裸の老女

——プラトン『国家』篇のフェミニズムをめぐる対話⁽¹⁾——

C. D. C. リーブ

浅野 幸治訳

アリストテレスの弟子のディカイアルコス⁽²⁾はテオフラストスと同時代の人であるが、その語るところによると、プラトンのアカデメイア学園には二人の女子学生がいた。更に、その内の一人は男物の服を着ていた、という興味深い事実をディカイアルコスは付け加えている。二人の女子学生の名前は、プレイウスのアクシオテアとマンティネイアのラステネイア⁽²⁾という。以下の対話は、カリポリス（即ち『国家』篇で述べられる理想国家）における女性の処遇という問題についてラステネイアとプラトンの間で交わされたものである。

ラステネイア プラトン先生、『国家』篇の第五卷について先生と一緒に議論をしたいのですが、よろしいでしょうか。私は『国家』篇第五卷はこれまで何度も読んでみましたが、依然としてよく解らない点がいくつかあります。

プラトン もちろん、『国家』篇でのソクラテスの考えについてなら、喜んで議論しよう。

ラステネイア 有り難うございます。ではまず、私がよく解らない点を述べてみます。ソクラテスは、『国家』篇第五卷で国の守護者に相応しい生き方について論じる際、女性守護者の訓練と教育の問題を取り上げていますが、そこでソクラテスは、女性守護者も男性守護者と同じ義務を負担することによって男性守護者の労働量を軽減すべきなのか、それとも「牝犬のほうは、子犬を産んで育てるためにそうした仕事はできないものとして、家の中に」⁽³⁾ (451d6-8) いるべきなのか、と尋ねます。言い換えれば、ソクラテスは、守護者になる女性は、伝統的には男性の領域であった名誉、政治、哲学の世界に男性と対等の資格で参加すべきであるのか、

それとも妊娠と出産における女性の役割の故に家に閉じ込められるべきなのか、を問題にしています。それに対してソクラテスの仮想上の反論者は、ソクラテス自身の分業化の原則に従うとすれば、男性と女性は妊娠・出産における役割が異なるので社会的な役割や仕事も異なる、と主張します。分業化の原則というのは、カリポリスに住むすべての人間は各自の自然的素質が最も適している一つの仕事にだけ専念しなければならないという原則ですが、プラトン先生は、ソクラテスが『国家』篇第二巻でこの原則を重要な原則とみなしており更に第四巻では正義を定義するのにも使っているのを覚えておられますよね。

プラトン もちろん。

ラストネイア そうすると、ソクラテスが妊娠・出産に基づく議論の問題点を見抜いて、妊娠と出産における役割の違いが仕事への適性と何の関係があるのか全く明らかでない、次のように指摘するのも覚えておられますね。

男性と女性の場合についても同じように、もし特定の仕事なり生き方なりにどちらか一方がとくに向いているとわかれば、そういう生き方をそれぞれに割り当てるべきだと、われわれは主張するだろう。けれども、もし女は子どもを生み男は生ませるという、ただそれだけが両性の相違点であるように見えるのならば、それだけではいっこうにまだ、われわれが問題としている点に関して女が男と異なっているということは、証明されたことにはならないと主張すべきだろう。そしてわれわれは依然として、われわれの国の守護者たちとその妻女たちとは、同じ生き方をしなければならないと考えつづけるだろう。(454d7-e4)

ですから、反論を主張し続けるためには、反論者は、男性と女性が全く異なった仕事への自然的素質を持つことを示す必要がありますが、ソクラテスは、それが可能だとは考えません。というのは、ソクラテスは、一般的には男性の方がたいていのことに関して女性よりも優れているけれども、自然的素質は「どちらの性にも同じようにばらまかれている」(454d7-e2)という考えだからです。ですから、男性の方が女性よりも一般的に優秀だとしても、女性にはこの仕事、男性にはあの仕事

と、性別によって仕事を区別する理由にはならないわけです。男性の場合と全く同じように、女性の場合も個々の人がそれぞれ金銭好きであったり名誉好きであったり知恵を愛する性格であったりします。ですから、ソクラテスは、カリポリスでは女性は家庭に閉じ込められるのではなく、たとえ体育場では老女が男性とならんで裸で体育訓練することになりそれに応じて人々の意識も変革しなければならないとしても（452a7-e3）、それぞれの女性が仕事——何かを生産するような仕事であれ国防の仕事であれ政治支配の仕事であれ（456a4-5, 540c5-7）各自の自然的素質に最も適した仕事——の訓練を受けるのだと言っています。というのも、ソクラテスが述べているように——ソクラテスのこの言葉は優れた発言だといつも私は感心しますが——「美しいものの基準を真剣に求めるにあたって、善いもの以外のものを基準とする者は愚か者である」（452e1-2）からです。

ここまではいいのです、ここまでのことは解ります。しかし、私が解らないのは、ソクラテスの提案がカリポリスに住むすべての女性を対象としているのかそれとも守護者になる女性だけを対象とするものなのかということです。この点に関してプラトン先生の『国家』篇の記述はあまり明快ではないと思うので、先生自身が、ソクラテスの考えだと思われるところをおっしゃって頂けませんか。

プラトン 確かに女性についての議論は守護者の生き方についての説明に組み込まれているし、女性で生産に携わる者の生き方は全く議論されていないので、ソクラテスの革命的提案は守護者になる女性だけを対象とし、女性で生産に携わる者はアテナイの労働者階級の女性に倣った生き方をするという印象を君が受けたとしても不思議ではない。しかし、ソクラテスの何気ない発言の中には、明らかに女性で生産に携わる者を対象とした発言があって、そういった発言によれば、ソクラテスが考える女性生産者の生活はアテナイの労働者階級の女性の生活とは非常に違うと思われる。例えば、第四巻の中で、ソクラテスは、「各人が一人で一つずつ自分の仕事を果し、それ以上の余計なことに手出しをしない」という原則が「子供のうちにも女のうちにも、奴隷のうちにも自由人のうちにも職人のうちにも、支配者のう

ちにも支配される者のうちにも」実現されるならばカリポリスの善に他の何よりも貢献すると言っている（433d1-5）。ここでは明らかに、女性生産者が、カリポリスに住む他のあらゆる人と同様に分業化の原則の対象であり、各人の自然的素質に最も適した仕事の訓練を受けるということが意味されている。確かにソクラテスは、大工の仕事に自然に適した女性がいることを前提しているし（454d5-9）、女性医師のことは明確に言及しているし、それぞれの仕事に対する自然的適性は男性にも女性にも見いだされると主張している（455d6-e7）、ソクラテスの意図では女性の実業家も男性の場合と全く同様にそれぞれの適性にあった仕事の訓練を受けるという結論は避け難い。大工も医師もその他の職人もすべてカリポリスの中の生産者であって、守護者ではないからだ。ソクラテスは、幼児保育に関しても明確ではないけれども、幼児保育も分業化の原則に基づいた仕事であり従って子供の世話への自然的適性が高い男性や女性の手にゆだねるべきだと考えている可能性もある。しかし、とにかく男性であれ女性であれ生産者の問題に関してはソクラテスは余りはっきりしていない、従って「もし実際に二親ともが保育以外の仕事を持っていたら誰が家事を行い子供を育てるのか」という重要な問題に関して僕達にはソクラテスの意見が余り解らない、ということは認めるよ。恐らく、ソクラテスは、幼児用の保育所だけでなくそれより年長の子供のための保育所も用意すべきだったのかもしれない。

ラステネイア 大事な箇所について教えて頂きまして、有り難うございます。アクシオテアも私もこの問題について前に話していた時には、プラトン先生の言われた箇所のことを十分考えなかったのだと思います。

プラトン 確かに、見過ごしやすい箇所だから、それらの箇所のことを忘れたのは君一人ではない。他の人達も同じ間違いを犯して、ソクラテスは守護者になる女性についてだけ「フェミニスト」だというのが明白な事実だと言っているよ。

ラステネイア 私は次にフェミニズムについてお尋ねしたいと思っていましたので、プラトン先生がフェミニズムの問題を持ち出して下さって、助かりました。先

生は、ソクラテスが本当にフェミニストだと思われますか。ソクラテスは、「女性の主張と権利」を代弁するのですか。(4)

プラトン もしフェミニストがラステネイアの言うように女性の主張と権利を代弁する者だとすれば、「マスキュリニスト」は男性の主張と権利を代弁する者か
ね。

ラステネイア そういうことになりますね。

プラトン そうだとすると、ソクラテスは、『国家』篇の中で男性であると女性であるとかかわらず人間一般の主張と権利を代弁していると思われるので、マスキュリニストでありフェミニストであり両方だということになる。しかし、特別に女性の主張と権利を代弁する者とか女性の主張と権利だけを代弁する者という方がフェミニストを正確に定義しているのではないか、と僕は思っていた。この定義によればもちろん、ソクラテスは、確かにフェミニストではない（マスキュリニストでもない）し、仮にソクラテスでなくともいやしくも正義を守ろうとする者ならばフェミニストではありえないだろう。そうは思わないかね。

ラステネイア そうですか、一応解ります。女性の主張と権利が人間一般の主張と権利よりも重要だという考えは、正義にかなっていないということですね。

プラトン まあ、そんなところだろう。

ラステネイア ですが、一番抑圧されている人達の主張と権利にまず注目することが重要だということは、否定されませんね。

プラトン それは否定しないよ。ただ、フェミニストの中には、男性を疫病か邪魔者のように世界から根絶すべきだという考えのフェミニストがいるように思われるが、ソクラテスの考えは、悪い人間（男性であっても女性であっても）を追放し、善い人間（男性であっても女性であっても）を市民とすべきだというのだ。この点で、例えばヘシオドスはパンドラの神話物語の中で女性をあらゆる悪の源としているが、ヘシオドスのような人物とソクラテスは対比されるべきであり、同じくとんでもない男性神話を信じている女性とも対比されるべきだと思う。

ラストネイア 確かにそれは重要な論点ですが、しかし、ソクラテスは女性について革命的な考えを色々持っているにもかかわらず、ソクラテスの言葉はしばしば、ソクラテスが本音では伝統的な男尊女卑の信奉者だということを指し示していると思われませんか。

プラトン どういう意味かね。

ラストネイア 次の箇所を見て頂ければ、お解りになるでしょう。

そしてまた、たくさんの種々さまざまな欲望や快樂や苦痛を、主として子供たちや女たちや召使たちや、さらに自由人とは名ばかりの多くのつまらぬ人たちのなかに、ひとは見出すことができるだろう。(431b9-c3)

ここでソクラテスは、女性を召使や子供やつまらぬ人たちと一緒にしています。あまり啓蒙されているとは思えませんね。ソクラテスが言っているのは、まさに市場や体育場で男性が女性について言いそうなことです。二つ目の箇所はこうです。

それにしても屍体から剥ぎ取るとは、卑しくもまた貪欲なことだとは思わないかね？真の敵はもはや飛び去って、戦うのに用いたものを後に残しているだけなのに、その死者の身体を敵と見なすとは、女々しくもまた狭小な精神のすることではないかね？それとも君には、そんなことをする者たちは、自分に投げられた石に怒って、投げている人には構わない犬たちと、少しでも違ったことをしていると思えるかね？(469d6-e2)

これについては、もう言うまでもありませんね。ソクラテスがこういうことを言うのを聞く時に私やアクシオテアがどう感じるか、考えてみて下さい。そういうことは、普通の男性が言っても十分ひどいのですが、自分の尊敬する先生の口から言われる場合にはほとんど胸が痛みます。

プラトン ラステネイアに正直に言わねばならないが、僕は、君の引用した箇所がソクラテスの男尊女卑を証明しているとは思わない、というのも、そこでソクラテスが語っているのはソクラテスの時代にアテナイに実際にいた女性、今の時代で

も実際にいる女性、つまり男性に抑圧され家庭に閉じ込められている女性のことにはすぎないからだ。だから、そのソクラテスの言葉は、カリポリスに住む女性や、君やアクシオテアのような自由教育を受けた女性については言われまいだろう。あるいは、ラステネイアは、ソクラテスがそんなことを言うと思うかね。

ラステネイア 言わないでしょうね。

プラトン そうすると、君の引用した箇所ではソクラテスが軽蔑しているのは、女性一般、女性である限りの女性ではなくて、社会によって愚かな生き物にされてしまった女性のことなのだが、女性を愚かにした社会はもっと愚かなのだ。

ラステネイア 確かにその説明だと先ほどの箇所は納得がいくと思いますが、次の箇所は説明できないのではないのでしょうか。『国家』篇第五卷からですが、

それでは君は、およそ人間が習いおぼえる仕事で、いま言ったすべての点で男性が女性よりまさっていないようなものを、何か知っているかね。

(455c4-6)

ここではソクラテスは、確かに女性である限りの女性について語っていますし、あらゆる工芸、仕事、学問において女性が男性に劣ると言っています。ですから、こういう主張をする時、ソクラテスは、抑圧された女性（そういう女性しかいなかったのですから）についての事実から、男女の機会均等が保証された場合の女性も含めた女性一般についての結論を不当に引き出していると私には思われます。

プラトン その点は、確かに、認めなければならないだろうと思う。ソクラテスは、自分の主張の根拠が不完全なものであること、そしてカリポリスのように正義の実現した抑圧のない社会では、すべてにおいて女性が男性よりもはるかに優っている可能性もあることを忘れていたようだ。

ラステネイア 先生がやっとソクラテスの非を認めて下さったので、今度はもっと決定的な証拠として、次の箇所を見て下さい。『国家』篇第八卷からですが、こうです。

民主制の国家に生じる最大の自由は、買われてきた奴隷たちが、男でも女でも、買ったほうの主人に劣らず自由であるという状態のうちに達成されるだろう。それにまた、女が男に対し、男が女に対する関係のうちに、どれほどの平等と自由が生じるか、それをもう少しで言い忘れるところだった。 (563b4-9)

明らかにここで、ソクラテスは、男女の法的平等が悪いことだということを意味しているのではないのでしょうか。そして、それは、ソクラテスがカリポリスの中でそういう平等を実現する考えのないことを示唆するのではないのでしょうか。

プラトン 確かに君の言うように、今の箇所にはそういうような意味あいや示唆があるように思われる。しかし、意味あいや示唆は、明確な言明とは異なるのではないだろうか。しかも『国家』篇第五卷には、自然的素質の等しい男性と女性は全く同様にあつかわれるというソクラテスの明確な言明がある。ともかく、ソクラテスの批判の矛先は明らかに、自然的素質の等しくない男性と女性がアテナイでは対等なものとしてあつかわれるという事実に向けられていると僕には思われる。だから、僕は、ラステネイアが言うような極端な読み方に走らなければならない理由は全然ないと思う。

ラステネイア そうすると今度は私がおれる番ですね、というのも先生が指摘されたように、確かに今の箇所は先生の言われる解釈ができるでしょうし、そう解釈すると、『国家』篇第五卷のソクラテスの明確な言明とも矛盾しませんからね。ですから、このことに関しては先生が正しく、私の方が性急であったと思います。

プラトン ラステネイア。友は大事だが、真理はもっと大事なものだよ。ソクラテスは偉大な友であり、ソクラテスのことは徹底的に弁護するつもりだが、君も知っている通り、ソクラテスだったら、僕達が、たとえ友を論駁することになっても議論を追求し常に議論に従っていくことを望んだだろう。

ラステネイア 先生は私達の議論がもう終わったと思われているようですが、私は最も強力な議論を最後まで取って置きました。

プラトン それはどういう議論だろう。

ラステネイア もしカリポリスの中で女性と男性が対等の権利を持つのなら、女性の価値主張も男性の価値主張と対等に考慮されなければならないのではないのでしょうか。

プラトン そうだろうね。

ラステネイア では言いますが、男性は戦争や哲学に非常に高い価値を置きます。

プラトン 男性はそうだね。

ラステネイア ところが、伝統的に女性は戦争や哲学といったものに全く価値をおきません。

プラトン そのとおり。

ラステネイア 女性が伝統的に価値を置くのは、織物や料理や子供の養育や更に結婚生活がもたらす情緒的暖かみや親密さです。

プラトン たしかに。

ラステネイア そうです。そうすると、カリポリスが男性と女性に対等の権利を認めるためには、この二種類のもの、つまり哲学や戦争と家庭性（こう短くまとめて呼びますが）とが対等に考慮されなければならないでしょう。しかし実際には、そうなってはいません。ソクラテスは、哲学や戦争には価値があり何かに妨げられない限りは男性であれ女性であれ誰でも哲学や戦争を望むが家庭性は無価値であり全面的に放擲されるべきだと、単純に考えています。だから、ソクラテスは、子供の（ともかく守護者の子供は）養育を「保育を仕事とする人」の手にまかせ、守護者には親密さとか家庭性が全くないようにしているのです。その結果、ソクラテスは、女性の正当な権利を全く認めていず男性の主張と権利ほどには女性の主張と権利を代弁していないと思われるのです。ソクラテスが実際にしているのは、まず世界を全面的に「男性化」すること、それからその「男性化」された世界の中で女性に「男性」になる自由を与えることです。これでは、権利が対等だとは言えません。もし私が計画するカリポリス、つまり男性には織物をしたり料理をしたり子供

を養育したりする自由は与えられますが、哲学や戦争は全面的に放擲されているか他人の手に独占されているようなカリポリスを想像して頂ければ、この論点ははっきり解って頂けるでしょう。そんな社会を見て、男性にも正当な権利が認められていると思う男性がいるのでしょうか。カリポリスにおける男性による支配は、見かけよりも巧妙で根が深いのです。実際の所、男性による支配はソクラテスの想像力に深く浸透しており、ソクラテスが想像するカリポリスはソクラテスでさえも気付かないような仕方で男性による支配に汚染されています。その結果、ソクラテスの理想の社会は、男性と女性に対等な権利を認めようと努力していますが、実際には女性の価値をほとんど完全に絶滅させることによってかつてないほど効果的に女性を男性に従属させています。その理想の社会とは、男性と女性に対等な権利が認められる世界ではなく、女性が存在しない世界、別の言い方をすればペニスを持った男性とペニスを持たない男性からなる世界に過ぎないのです。先生の身近でも、ここアカデメイアでアクシオテアが男性用の服を着だしたのを、そして今ではほとんど男性として通用するくらいなのをご存知でしょう。このことは、先生が女子学生を受け入れるほどに心の開かれた人であるにも拘わらず、アカデメイアがいかにも「男性化」された所かということをよく示していると思います。

プラトン これは、今までに聞いたこともない強力な批判だ。男性だったらアリストテレスほど優秀な者でも今の批判を思いつくことができたとは思えないので、ラステネイアがアカデメイアにいてくれたのを嬉しく思う。実際、これは非常にいい批判で、僕の心の中で僕自身の思考と想像について、それらがいかにもラステネイアの言う根深い男性主義の影響を受けているかについて多くの疑問が浮かんでくるし、女性を抑圧する男性に過ぎないと思われたくないなので、反対するのが恐いくらいだ。だから、まず僕の質問に答えてくれ。ラステネイアは、僕たちの間では、議論によって物事を決めさせてくれるだろうか。それとも、もし僕がラステネイアと議論したら、僕はもう尊敬されない敵になるのだろうか。

ラステネイア 二、三日、私は、議論と問答つまりアカデメイアにおいて哲学

の名で実践されていることは剣ではないが言葉による攻撃競争に過ぎないとアクシオテアに言いました。男性教師の一人——確かスペウシッポスだったと思います——が、私の言葉を耳にして、「魂の理性的部分に性別はない」と言いました。

『ティーマイオス』の中では魂の理性的部分は男性の身体にも女性の身体にも入ることができるように思えますから、スペウシッポスは『ティーマイオス』のことが念頭にあったのだと思います。それはともかく、明らかにスペウシッポスは、理性——従って哲学、議論、問答——は男性でも女性でもないということが言いたかったのです。私はどう答えたらいいのか知りませんでした。後でアクシオテアが私に問題を少し別の角度から示してくれました。アクシオテアは、女性が何か女性にとってよいものを「男性的」だからという理由で使用不可だとするのは馬鹿げていると言うのです。女性は、純粹主義ではなく便宜主義を採用し、女性解放に使えるものはほとんど何でも使うようにすべきなのです。このアクシオテアの見解は正しいと思います。男性が作ったものはすべて汚染されていて女性が使えるようなものは一つもないと主張することは、女性自身を弱めることになります。誰が作ったのであろうと、よいものは取り、例えば結婚のように女性が自分達にとって価値があると長く思ってきたものであっても、もし悪いものであれば捨てるべきです。ですから、私としては、先生の反論を聞かせて頂きたいと思います。ただし、もし結論が女性の抑圧または抑圧を甘受するような女性の教育を促進すると思われる場合には、私は哲学が真に客観的であり先入観に支配されていなければそんな結論になるはずがないと思いますので、先生の結論には同意しません。

プラトン アクシオテアの言葉は正当なアドバイスだしラステネイアの付け加えている条件も疑いもなく賢明だと思う。そこで、僕の答えとしては、前に一度ラステネイアと同じマンティネイア出身の女性のディオティマから聞いた譬え話を話そう。ディオティマが言うには、神々が世界を作っていた時、あらゆる動物によいものを与え、またよいと思われるがよくないものも与えた。人間に与えたものの中には、ラステネイアがさっき言っていた哲学、戦争、織物、料理、深い情緒的結びつ

きを育て子供を立派に養育する能力が含まれる。神々は、こういったものを人間にアトランダムに与えた。しかし、くじ運のせいで、男性はたいてい哲学と戦争をもらって、女性はたいていラステネイアがさっき家庭的と呼んだものをもらった。時間が経過し、習慣と伝統がその働きを示し、男性も女性もそれぞれ自分の性に与えられたものが本当によいものであり反対の性に与えられたものはよいと思われるに過ぎないと考えるようになった。というのがディオティマの話で、それが意味しているのは確かに、こういったよいものの内どっちが本当によいものかは、男性も女性もそれぞれ自分がもらったものだけが本当によいものだと考えしかも両方が正しいことはあり得ないから、その所有者の意見によっては決められないということだ。

ラステネイア 先生の言いたいことは解るような気がします。もし男性が伝統的に価値があると思うもの、戦争や哲学が本当によいものであり女性が伝統的に価値があると思うものがよいと思われるに過ぎないのであったら、ソクラテスがカリポリスの「男性化」を行うのは、女性はよいと思われるに過ぎないものを奪われ代わりに本当によいものを与えられるのだから、女性に対して不正なことをしていることにはならないということなんでしょう。私の議論に対してそういう答えを考えつくとは、ディオティマというのは非常に賢い人なんですね。それに私は、自分こそマンティネイア出身の最初の女性哲学者だとしてつきり思っていました。しかし、その答えは本当に決定的な答えですか。すべての女性は伝統的に女性の活動と仕事に価値を見いだすがそれは間違っていて、すべての男性は伝統的に男性の活動と仕事に価値を見いだすがそれは正しいという考えは、本当に説得力があるのでしょうか。

プラトン それについては、ディオティマのもう一つ別の物語をしたら、一番いい答えになる。こんどの物語では、神々は、よいものもよいと思われるだけのものもすべて男性にも女性にもすべての人間に与えた。しかし今度は、男性も女性も全員が同じように家庭的なものこそ本当に価値あるものだと考えた。そして男性は、たまたま女性よりも肉体的に強かったので、家庭的なものを自分のものにして戦争

や哲学は女性にまかせようとした。しかし男性は、子供の出産や授乳はできなかったので、女性に家庭的なものも少しはまかせざるを得なかった。だから子供の養育を最初の五年間は女性にまかせた。女性は、男の子の頭に軍人の勇ましい話や哲学の喜びを吹き込み、男親の弱虫軟弱さをなじった。やがて時が経つにつれて習慣と伝統がその働きを示し、男性はみんな戦争や哲学に夢中になるようになり、女性は本当によいものをすべて手にすることができた。

ラステネイア やっぱり、ディオティマの言いたいことは解ります。本当に価値あるものは何かという問いは人々の意見だけでは決定できないと、言っているのです。そして確かにそれは正しい点で、人々が男性であっても女性であっても変わりません。しかしもしディオティマが正しく、何が価値あり何がそうでないのかという問題に関して人々の証言に直接うったえかけることができないのであれば、ソクラテスがカリポリスを「男性化」するのは女性に対して不正なことをしているのか、それともよいと思われるものの代わりに本当によいものを女性に与えているのかは、どうやって決めればいいんでしょうか。

プラトン それこそまさに『国家』篇の主題だと僕は思う。

ラステネイア もちろん、その通りです。議論に熱中した余り、『国家』篇が女性を主題的に論じたものではなく、どうしたら価値についての確実かつ客観的な知識を獲得できるかを主題としていることをほとんど忘れていました。でも先生、私達は今その知識を持っていませんし、永遠に持てない可能性さえあります。そうすると、さしあたり今のところは私達はどうしたらいいんでしょうか。

プラトン さしあたり今のところは、僕達は、価値について絶対的な自信を持てるような知識を持っていないこと、そういう知識を得るために全力を尽くすべきだということが解ればいい。考えてみれば、戦争だとか家庭的な生活だとかが本当によいものだという事は決して明らかでないからね。

ラステネイア 哲学はどうなんですか、先生、哲学についても同じですか。ひょっとしたら哲学も結局のところ私達が捨てるべきものだという事になるで

しょうか。

プラトン ラステネイアの今の質問は抽象的なままだと、答えるのは難しい。しかし、ソクラテスは、男性が女性の抑圧を正当化するのに利用した非常に多くの議論の誤りを哲学によって見抜くことができたのだし、ソクラテスがギリシア文化の女性に対する偏見を（それなりの限界はあったにせよ）克服したのも哲学によってなのだ。確かに、ソクラテスは、ソクラテスが見抜くべきだったと僕達が考えることのすべてを見抜きはしなかったし、間違いも犯したかもしれないけれども、ラステネイアがソクラテスの誤りを見抜きソクラテス以上にものごとを理解できるのもラステネイア自身の哲学の知識、ここアカデメイアでの教育によってではないのだろうか。

ラステネイア ですけれども、やっぱり、哲学は余りにも競争心があって余りにも戦闘的で、こう言わせて頂ければ男性的過ぎると思えるのです。

プラトン 確かに哲学は、伝統的に男性の特権だったから服は男物の服を着ている。

ラステネイア しかし服の中は男性でも女性でもない、ということですか。

プラトン スペウシッポスは、理性に性別はないと言ったね。哲学についても同じことが言えると僕は思う。

ラステネイア 私は、先生が不自然な感じなしに哲学をするのに女性用の服を着なければならなくってもやはりそう思われるかどうか、疑問だと思います。

- (1) [訳者解題] プラトンのフェミニズムという主題は日本ではあまり論じられることのない主題であるが、アメリカではかなり熱心に論じられており、ここに訳したリーブの対話篇はその好例である。プラトンの『国家』篇が、アメリカの文化的伝統の中では、フェミニズムという現代的な話題について議論したり考えたりするための格好の場になっているのがよくうかがえる。

翻訳の原文は、アメリカで哲学の教科書などを出版しているハケット出版社の1992年秋の総合図書目録に掲載された C. D. C. リーブ (C. D. C. Reeve) の 'The Naked Old Women in the Palaestra: A Dialogue Between Plato and Lasthenia of Mantinea' という対話篇である。また対話篇に付された解説によれば、この対話は、元々1991年秋にブラウン大学で開かれたボストン地域古代哲学研究会 (Boston Area Colloquium for Ancient Philosophy) の席上で発表された。リーブはオレゴン州ポー

トランド市にあるリード大学 (Reed College) 哲学科の教授で、著書に *Philosopher-Kings: The Argument of Plato's Republic* (1988)、*Socrates in the Apology: An Essay on Plato's Apology of Socrates* (1989)、および *Practices of Reason: Aristotle's Nicomachean Ethics* (1992) がある。翻訳掲載の許可を頂いたリーブ教授とハケット出版社には、この場を借りて謝意を表する次第である。

- (2) [訳注] ディカイアルコス、アクシオテア、ラステネイアは、すべて歴史上に実在した人物である。アクシオテアとラステネイアについては、ディオゲネス・ラエルチオス『ギリシア哲学者列伝』上中下 (加来彰俊訳、岩波文庫、1984年、1989年、1994年) の第三卷四六節、第四卷二節を参照、ディカイアルコスについては、第一卷四〇～四一節、第三卷四節、三八節、および第八卷四〇節を参照。
- (3) [訳注] プラトン『国家』篇からの引用は、基本的には藤沢令夫訳 (岩波文庫、1979年) を利用した。但し、場合によっては本翻訳に合わせるために若干の変更を加えた箇所もある。
- (4) これが、*The Shorter Oxford English Dictionary* (1973) に掲げられたフェミニストの定義である。

(阪南大学・神戸学院大学非常勤講師)

(付記 本翻訳は、神戸大学哲学懇話会『愛知』第11号 (1994年)、75～87頁で発表したものである。)